町会を支える女性の力

島部会之月三町

つきたてのお餅のおいしさとともに伝えたい真心

月島三之部町会　女性対策部長　柴崎直子さん

「私は新しく越してきた方や若い方など、どなたでも町会や女性対策部に歓迎します。」と、女性対策部長の柴崎さんは未来の町会を見据えています。多くの人が集まるお祭りなどのイベントは会話ができるチャンスでもあるため、小さいお子さんを連れて来ているお母さんたちには「一緒に町会活動に参加しませんか？」と、気軽に声をかけているそうです。

「男性が気付かないような細かいところにまで気を配れるのは、やはり女性だと思います。新しい方を受け入れると同時に、女性対策部のリーダーの育成も視野に入れながら活動しています。」と、勧誘活動だけにとどまらずに女性対策部の地盤も固めている柴崎さん。今では若い方を含め、柴崎さんの後継者候補が何人もいるそうです。

柴崎さんは結婚と同時に月島に移り住み、お姑さんと入れ替わるようにして当時の婦人部に入り、五十年以上携わってきました。その間、時代の流れとともに婦人部は女性対策部へと名称を変えながらも、清掃活動をはじめ地域のための活動は昔も今も女性が中心となって支え続けています。

「住んでいる以上は自分たちの町会を誇りに思える環境づくりが大切です。しかしそれは義務ではなく、自然と地域にお住まいの方が率先して行動するのが本来の姿ですよね。そのための雰囲気づくりから私たちは始めています。」と言います。

雰囲気づくりのひとつとして柴崎さんは「楽しみも必要」と提案し、新年会には福引きを用意して会場を沸かせます。時には会合に手作りのお萩を持参して、お茶の時間を楽しみます。また、夏の暑い時に廃品回収をする町会の男性にはかき氷や冷たい飲み物を差し入れ、楽しみだけでなく感謝の気持ちを伝えることも忘れません。そうした柴崎さんの心遣いは地域へと広がっていきます。「地域のために何かできることを」ということで、最近では町会や女性対策部の活動以外に率先してゴミを拾うなど、地域のための活動をする方が増えて町会が活気づいてきたそうです。

また、柴崎さんは積極的かつ柔軟に若い人の意見も取り入れるべきだと考えています。従来の考え方にとらわれず、時代の流れも取り入れる、そういうことも町会に活気をもたらす秘けつなのでしょう。そんな柴崎さんでも、これだけは譲れないということがあるといいます。

「イベントで出している手作りの食べ物は手間暇がかかるから買ってきたもので代用してはどうか、という意見も出てきます。労力もお金も効率化が図れて一理あるとは思いますが、やはり真心込めて作ったものは皆さんに必ず伝わります。だから大変だけどそこはやりましょう、と説得するんです。」柴崎さんはそうした真心を身近に実感できるのが町会の餅つきだと言います。

月島三之部町会の餅つきは毎年一月に行われ、つきたてのお餅が町会の人たちに配られます。その中心となっているのが割烹着を着た女性対策部の皆さんです。昨年は三百三十キロもの餅を男性がつき、女性対策部の皆さんの手によって伸したり丸めたりされて、のし餅や、なまこ餅に形を変えて配られました。また、あんこは百キロ用意され、ひとつひとつお餅にくるまれ、千二百七十二個もの大福が作られたそうです。

「裏方の仕事だからそれは大変ですよ。でもつきたてのお餅っていうのはなかなか食べる機会がありませんよね。それにあのおいしさは食べた人にしか分かりませんから、皆さんとても喜んでくれて、毎年楽しみにしていてくださるんです。」と柴崎さんは顔をほころばせます。

昭和の時代と比べると月島の町も高層マンションが建ち並び、景色は様変わりしました。その中でも月島が下町らしい一角を残し続けるように、時代の流れを柔軟に取り入れながらも町を愛する気持ちは人から人へと継承されていっているようです。その一端を担うのがいきいきと活動する女性の力なのです。

企業との連携で活力のある町づくりへ

京橋三丁目町会長　壁谷辰弥さん

銀座と日本橋地域に挟まれた、交通と商業の中心である東京駅周辺の商業ビルが林立するビジネス街に京橋三丁目町会があります。居住する町会員は十数名しかおらず、町会員の多くはこの地区に在籍する企業の方（法人会員）です。こうした居住者の少ないビジネス街は、居住者の転出、企業の町会離れ、休日の閑散化など、大きな課題を抱えています。これらの問題は「町会の存続に大きな影響が出ることが予想され、大変厳しい状況にあります。」と、町会長の壁谷さんは危機感を募らせます。

こうした事態に壁谷さんは「私たちのようなビジネス街の町会において企業の町会離れは、町会にとって最大のピンチではありますが、考え方を変えれば町会再生の最大のチャンスともいえます。」と、町会再生に意欲を見せます。また、ビジネス街の町会も環境に配慮した活動をしていかなければなりません。町会再生にあたり、制約が多い運営に対して「エコロジーの精神も必要」と訴え続けてきました。

壁谷さんがエコロジーな町会再生を目指した『京橋活性化を考える会』を立ち上げたのは2年前になります。町会員に限らず、企業の方とまず仲良くならなければ町会は発展しないと考え、一杯飲みながら「京橋地域について自由に語っていただくこと」を契機に会は始まりました。今では壁谷さんの積極的なコミュニケーションが実を結び、会場には京橋地域に籍を置く企業の方を含め30名以上の参加者が集い、これからのビジネス街の在り方について活発な意見交換が行われています。さらに京橋という「歴史ある街への誇り」を取り戻すためにも歴史の再認識が重要と考え、江戸東京博物館の館長、中央区都市計画課の職員、東京大学大学院工学系研究科の教授などに依頼し、京橋地域の歴史を中心とした講演会も重ねてきました。

そうした意見交換の場で町会員の中から多くの声があがったのが「京橋川の再生」の要望です。京橋は昭和34（1959）年、京橋川の埋め立てに伴い撤去され、日本橋とともに江戸時代から親しまれていた橋です。京橋地域の象徴ともいうべき京橋川の再生は「エコロジーと共存するビジネス街」の大きな柱であると、壁谷さんも確信しています。

また町会の存在について壁谷さんは、「地域の活性化ももちろんそうですが、町会は地域住民と行政の連絡を滞りなく伝達するために必要不可欠な存在であり、それが一番問われるのが災害時なんです。」と主張します。

「多くの会社は独自に防災訓練を行い、防災用品も備えているようですが、会社の外に出たら地域住民と何ら変わりありません。ですからここの地域を知ってもらい、お互いに力を合せて行動するためにも町会に入っていただきたいですね。」と、未加入の企業の方にも町会への参加を積極的に呼びかけます。

こうした新規会員の加入促進のためにも、町会行事のさらなる充実を掲げ、新年会やお花見のほかに、この町会ならではの行事として秋に東京国立近代美術館フィルムセンターを借り切って映画鑑賞会を行っています。第一回目は黒沢監督の『用心棒』を、昨年は小津安二郎の『東京物語』を上映しました。名画を大スクリーンで鑑賞できたということもあり、会場は感激のため息に包まれたといいます。

「企業の方を含め、一人でも多くの方にこうしたイベントに参加してもらい、楽しんでいただきたいです。私は3年前に町会長になりましたが、以前はこの地区で蕎麦屋をやっておりました。今でこそ町会の関係で企業の方にお会いする機会が増えましたが、意外に『蕎麦屋のおやじ』として皆さん顔を覚えていらっしゃるんですよ。」と、ビジネス街に息づく人情に町会の未来を託します。

そして壁谷さんはこれまでの活動が功を奏し、ビジネス街の町会が活性化に向けて少しずつ前進していることに自信をのぞかせます。

「憩い集えるまちになるように、これまでも企業の方と積極的にコミュニケーションをとって信頼関係を築いてきました。もちろん会費はいただきますが、せっかく日本を代表する会社が何社もあるのですから町会と企業がギブアンドテイクでやっていけたら、と思います。それが今後のビジネス街の町会の在り方ではないでしょうか。」と結ばれました。

企業の方へ

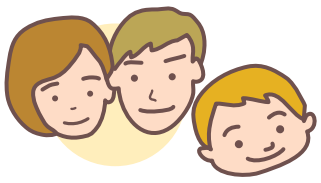
～町会では法人会員の方も募集しています～

皆さんは自分が働いているビルや会社がどこの町会に属していて、どなたが町会長かご存知ですか？

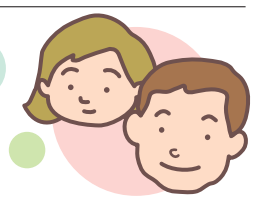
都心である「中央区」は、事務所数4万4千、従業員数73万人を抱える文化・商業・情報の一大中心地です。このまちが、ひとたび大地震などの災害に襲われれば、多くの人が地域にあふれ大混乱を招く危険性があります。

町会は地域の活性化とともに、行政と連携して防災・防犯活動など安全で安心して暮らせるまちづくりにも貢献されています。日頃から町会との連携を深め、地域間での協力体制を築いておくことが大切です。また、映画鑑賞会やお花見など、町会が主催するさまざまなイベントに参加することができ、日中多くの時間を過ごす地域の方との交流を図ることもできます。

ぜひ、町会未加入の企業の方は、これを機会に加入しましょう！



未来に継承されるまちの絆



深川八幡祭り

祭りを通じて見据えるまちの未来

新川二丁目越一町会　神輿総代　青年部長　府川晃久さん

三年に一度の富岡八幡宮例大祭の最終日の朝、江東区の深川にある富岡八幡宮前には、このあたり一帯の各町会が所有する自慢の五十数基の神輿がずらりと並びます。去年の八月中旬、府川さんが所属する新川二丁目越一町会の神輿もこの風景の中にありました。

神様の分身が乗ると言われる神輿は美しい意匠が施され、それらを誇らしく担ぐのは総勢約二万人もの各町会の半纏に身を包んだ担ぎ手たち。別名「水掛け祭り」と呼ばれるこの祭りは、沿道の観客が神輿に向かって水を掛けて清めます。水しぶきと歓声が飛び交い、担ぎ手たちの威勢の良い「ワッショイ、ワッショイ」のかけ声が町中に響き渡る中、「神様の大行列」は富岡八幡宮を出発します。早朝に出発した神輿の先頭が永代橋を渡って出発地点の富岡八幡宮に戻る頃にはお昼をすぎ、およそ八キロの行程を熱気とともに巡ります。真夏の炎天下、長い行程を担ぎ手が一致団結して神輿を担ぐことで、日ごろの感謝の祈りを神様へ捧げているのだそうです。江戸から続くこの祭りは、色あせることなく現代に伝わっているといえましょう。

その祭りの魅力を新川二丁目越一町会の神輿総代でもあり青年部長の府川さんは「もうとにかく盛り上がります。私の町会は担ぎ手も多くて五百人くらい集まりました。人のつながりや伝統、下町の良さなどを肌で実感できるのがこの祭りです。」と語ります。一つの神輿を担いだ一体感が人との絆を強くし、さらには地域への思いを強くさせているようです。

また、若い人たちの町会離れも祭りによって食い止められると考え、その活動の一つとして昨年ホームページを立ち上げました。

「この周辺も新しいマンションが増えてきました。転入された方が何かのきっかけで検索してくれたらいいなと思い、作成しました。数名ですが『私も神輿を担げますか？』という問い合わせがあり、うれしい限りです。」と府川さん。祭りの話を通じてコミュニケーションを深め、町会や青年部の勧誘もまめに声をかけながら、積極的に地域のために活動されています。

府川さんはこれからの町会のあり方について語ります。

「町会は何世代も交代しながら受け継がれてきました。今度は私たちのような若い世代が先輩方の指導を受けながら、地域を活気付けていけたらと思います。今回のような祭りで神輿を担ぐ私たちを見て、若い世代の人たちが『かっこいい』と思い、町会活動に協力してくれたら、それはうれしいことですよね。」

昨年の本祭りを終え、すでに府川さんのまなざしは、三年後の本祭りへ、未来へと向けられています。

ゴノちゃん運動会

若い力が団結するゴノちゃん運動会

中洲町会副会長　日本橋五の部地区委員会　伊藤一彦さん

毎年十月、日本橋五の部連合町会の十町会合同で開催されるゴノちゃん運動会。各町会から選出された実行委員や日本橋五の部地区委員会をはじめ、中洲町会の伊藤さんたちも数カ月前から準備に取り掛かります。日本橋「五の部」から名前がつけられたこの運動会も、昨年で三十回目を迎え、会場の浜町運動場には各町会からそれぞれ百人近く、総勢七百人以上の人たちが参加しました。

子どもから大人まで世代を問わず参加者を楽しませたい、という考えは「うなぎ運びレース」をはじめ、ユニークな種目に表れています。ちなみに「うなぎ運びレース」とは日本橋名物のいきのいいなぎをリレーのバトン代わりにして、手の中でぬるぬると動き回るうなぎを渡していく、ゴノちゃん運動会でも観客を湧かせる競技の一つです。

ゴノちゃん運動会の準備に長年携わっている中州町会の伊藤さんは、「運動会の中でも町会対抗リレーは特に力が入ります。昔は小学校の運動会に行って、いい走りをする子に目を付けて町会対抗リレーで走ってもらいました。最近では少子化の影響もあって子どもが少なく、私たちの町会の子がほかの町会でも代理として走ることも多いんですよ。」と、各町会が融通を利かせながら町会間の親ぼくを深めています。

「新築マンションが多い町会からは、たくさんの子どもたちが参加してくれました。会場にたくさん人が集まれば自然と会話が生まれ、昼食時にはいい交流の場になっています。」と、伊藤さんはゴノちゃん運動会の成功を喜びます。

この運動会は多くの人が協力して成り立っていますが、その中には日本橋ジュニアクラブ（ＮＪＣ）という中学生から高校生たちの存在もあります。ＮＪＣとは、「思春期の難しい年頃にある青少年を地域で受け止めるべき」という理念の下、伊藤さんも所属する日本橋五の部地区委員会が昭和六十二年に発足した会です。発足当時からＮＪＣの活動をサポートしてきた伊藤さんは、「大人がきちんとした場を提供し、的確な指示を出せば彼らは動いてくれます。ああしろ、こうしろ、というように決め付けるのではなく、彼らの意見を尊重し居場所を提供してあげることが大切なのではないでしょうか。」と、青少年に対して真正面から向き合います。

それでも何かと心配になり活動している様子をこっそり見に行ったときには、「いとじい（伊藤さん）はもういいから、座ってて よ。」と、逆に心配されてしまう場面も多くなったと言います。

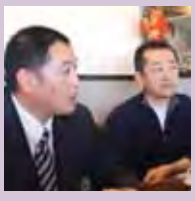
「子どもたちが不安定な時期から成長した、という安堵の気持ちと同時に巣立っていく寂しさも感じます。複雑な心境ではありますが、やはり嬉しさの気持ちの方が強いですね。」と、まるで雛の巣立ちを見守る親鳥のようです。

地域の絆はリレーのバトンのように、未来の担い手たちへと着実に受け継がれていきます。

住吉神社例大祭

祭り好きがみせる、町会の絆

勝どき西町会 防災部長　吉田豊さん（左）／会計　吉田善三さん



「ドーン、ドーン、カッカッカッ」と、小気味良いリズムの一番太鼓の音で住吉神社例大祭の朝が始まり、その音は、吉田さんたちの勝どき西町会にも届きます。

住吉神社例大祭の本祭りは三年に一度、八月上旬に佃をはじめとして月島、勝どき、豊海、晴海の月島地域全体で行われます。住吉講の若衆が住吉神社周辺の佃堀に埋めてある巨大な柱を引き出し、それを水洗いをするのは本祭りが行われる約一カ月前のこと。巨大な柱は佃の町内六カ所に立てられる高さ十八メートルに及ぶ五反幟の支柱としての大切な役目があり、普段は空気に触れて木が腐ってしまわないように川底に埋めてあるそうです。江戸の名残を色濃く残すこの祭りは、区民無形民俗文化財にも指定されている「獅子頭の宮出し」など、代表的な行事がたくさんあります。そして区民有形民俗文化財の住吉神社神輿（八角神輿）と、各町会の豪華絢爛な神輿や山車が月島地域の巡行を始めると、祭りは最高潮を迎えます。

勝どき地区は、勝どき西町会を含む四つの町会と、伝統を誇る月睦の皆さんで構成される大祭執行委員が祭りを執り行いました。昨年、特に大事な給水関係の仕事を任された吉田豊さんは、「想像を絶する炎天下で行われますから、水は欠かせません。今年は五十リットル以上の大きな樽を八十三個、バケツは百個、水を移動させるトラックや台車も用意して万全の体制で望みました。町会の皆さんの協力もあって今年は水が不足することもなく、熱中症で倒れた人もいませんでした。」と、町会の団結力を自負します。

会計の吉田善三さんは氏子や周辺住民の皆さん、企業に対して寄付金を募り、「執行委員の苦労もそうですが、金銭的な面でも各町会の方々などに支えられて成り立っているんです。」と豊さんと同様、地域の人々の善意や絆をかみしめます。大祭の三日間、執行委員は祭りに参加するどころではなく、裏方として休む間もなく動き回ります。それでも「祭りが好きだから」とお二人は口を揃えます。

そんなお二人が所属する勝どき西町会を含む勝どき地区の神輿は昭和十年に作られ、「私たちの神輿の美しさは別格です。」と、町内神輿について語ります。

祭りでは神輿も担ぎ手とともに大量の水が掛けられるために傷みが激しく、数年に一度は修理が必要となります。費用の面から約三十年先延ばしにされてきた神輿の大修理を決断したのは昨年の七月にお亡くなりになった前町会長の一声だそうです。「前町会長は本当に祭りが大好きな方でした。出棺のときも私たちが担いで『ソイヤソイヤ』のかけ声で送り出したほどです。」と、吉田善三さんは祭りに人生をかけた大先輩を偲びます。

祭りを通じて町会の団結力が強まり、若い世代へと着実に受け継がれています。町内神輿が鮮やかに蘇ったその日、勝どき西町会の絆もより一層深まったようです。

こんにちは町会です　第12号　平成21年3月発行　刊行物登録番号20-105　《企画・発行》中央区区民部地域振興課　中央区築地一丁目1番1号　03-3546-5336　《編集・デザイン》株式会社久栄社